

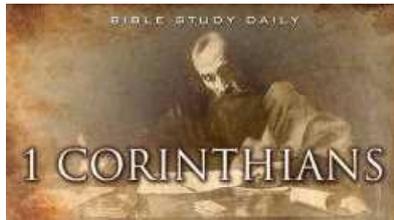
「キリストの土台の上に」

(1コリ3:10~17)

挽地茂男

2019.2.24 日本基督教団千歳丘教会礼拝

コリントの教会はパウロによって開拓された教会ですが、実に多くの問題を抱えた教会でありました。みなさんはコリントの信徒への手紙をお読みになると、分裂や不品行、「こんなことまで」と思われるような問題が出てまいります。しかし同時にこれらの問題にパウロが真剣に取り組んでくれたがゆえに、今日のわたしたちは、この手紙から、個人としても教会としても、非常に多くのことを学ぶことができるのです。それはパウロが言うように、「罪の増し加わるところに、神の恵みもまし加わる」からです。つまり「罪〔問題〕の増し加わるところには、(それを解決するための)神の恵みもまし加わる」ということなのです。本日の箇所はコリント教会の成長にとって、また今日のキリスト者や教会の成長にとっても根本的に重要な



事柄を伝えています。

パウロは先程読みました箇所の直前で——つまり先週学んだ箇所ですが——コリントの人々に向かって「**あなたがたは神の畑、神の建物なのです**」(9節)と語りました。つまり信仰者の生涯を、開墾し手入れし耕すべき田畑、またしっかりと建てあげるべき建築物と見なしているのです。大方の注解書は、この建築物がコリントの教会を指すと考えて、この箇所を教会を形成する〔教会を建て上げる〕ことを務めとするの教師や牧師や伝道者に対するメッセージと理解しております。つまり「教師(牧師、伝道者)たちよ、神の建物である教会をしっかりと建てなさい」と語っていると考えるのです。しかし〔教会を神の建物と見る見方は後代のマタイによる福音書やエフェソ書などに出てまいります。ここではそうはなく〕この3章の1節が「兄弟たち」という呼びかけで始まっていること、10節、13節の「**おのこの**」という言葉がコリント教会のメンバー各人を指す表現であり、16節の「**あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいる**

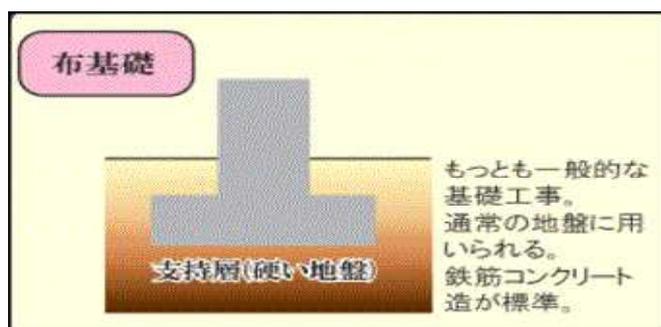
ことを知らないのですか」という言葉のように、神殿という建物が個人を指す表現として使用されていることからして、この箇所は個々の信仰者の信仰生涯をいかに建て上げるべきかということを主題にした、信徒へのメッセージということが分かります。もちろん個々の信仰者がしっかりと建て上げられることによって、最終的に、教会が堅固な建物として建ち上がるということは言うまでもありません。

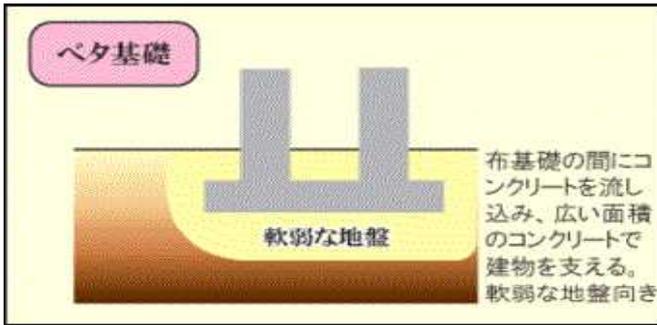


〈土台〉さて、まず建物ならば土台が問題になります。建築物の建物としての価値や強度は、まずその土台にかかっていることは言うまでもありません。パウロは、「¹⁰わたしは神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように、土台を据えました」と述べています。また彼は、「¹¹イエス・キリストというすでに据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできませ

ん」とも語っています。先程申しましたように、コリント教会を創設したのはパウロでありました。多くの困難と戦いながら、この地に開拓伝道をしたのは彼でした。コリント教会の礎石を据えたのは彼です。

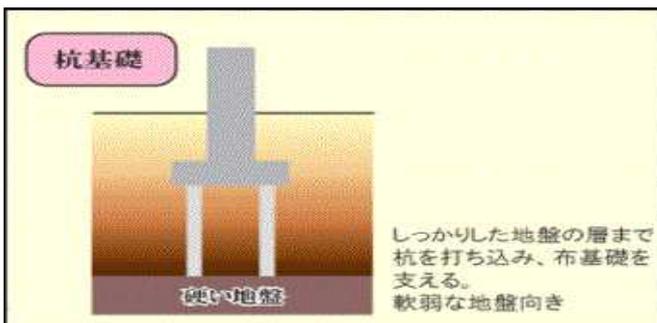
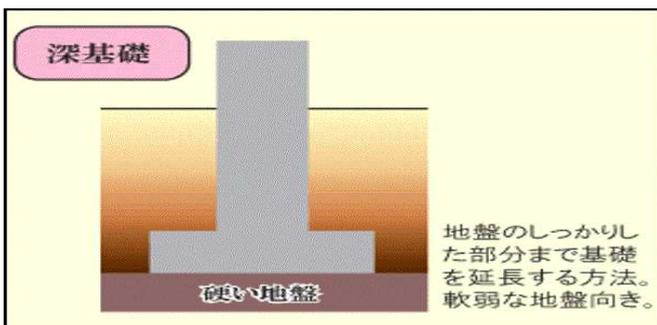
さて、建物にとって一番大切なのは土台です。信仰者の生涯という建物—また教会という信徒の集合体として形成される建物—を支える土台はキリストです。パウロはその土台をしっかりと据えたのです。「熟練した」と訳されているのは、「知恵のある」(σοφός ソφος)という言葉です。もちろん自分で自分のことを「知恵のある建築家」と呼ぶのをはばかったのか、真っ先に「神からいただいた恵みによって」(熟練した／知恵ある建築家のように)と断っております。コリントの人々の立っている土台、それは「神からいただいた恵みと知恵」によるパウロの深い配慮から据えられたキリ





ストという土台なのです。だからこそ堅固で、安心することが出来るのです。

家と土台ということを考えるとき、わたしたちが直ぐに思い出すのは、マタイによる福音書の「山上の説教」に出てくる「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」の譬話（7:24-27）ではないでしょうか。賢い人は思慮深く知恵を用いて、岩の上に家を建てます。愚かな人は浅慮にも、砂の上



に家を建てます。イスラエルの雨が降らない乾期には、岩の上に家を建てられた家も、砂の上に建てられた家も、どちらも表面上違いが見あたりません。しかし雨期がやってくると、その違いが明らかになります。その建築物の真価は

やがての雨と洪水によって、明らかにされます。建物の真価は先ず土台で決まって



©2011MMBOX PRODUCTION

しまうのです。マタイによる福音書では、この岩はペトロの信仰告白で明らかにされています。マタイ 16章 15 - 18 節です。「マタ 16:15 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」 16:16 シモン・ペトロが、「あなたはメシア〔原語「キリスト」〕、生ける神の子です」と答えた。16:17 すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ〔バルは息子、ヨナはヨハネのヘブライ語発音〕、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。16:18 わたしも言うておく。あなたはペトロ

〔岩〕。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」

キリストに対する信仰告白が土台なのです。パウロは、



サン・ピエトロ大聖堂(バチカン)

自分の力によってではなく、神の恵みによって「イエス・キリスト」という不動の礎石を据えたのです。やがてこの上に、礎石であるキリストの性質を思わせる、美しい建物が建てられることになるのです。後に続く建築作業のために据えられた土台はまずは完全なのです。この土台はだれであれ、勝手に取り代えることのできないものなのです。土台である「イエス・キリスト」は、わたしたち一人ひとりの主であり教会の主であり、教会の基礎なのです(エフェソ2:20)。しかもその土台は、十字架の上に人間の罪の赦しと愛を具体的なかたちとして現したキリスト、そして神が復活によってその御業をよしとされたキリストです。このイエス・キリストの上に立たずして、たとえそこにどのよ

うに壮麗なるものがそびえ立っていても、それは断じてキリスト者の生涯でも、キリストの教会でもないので。

〈家を建てる〉では、はたしてこの土台の上に人々は、どのように、またどのような材料で建物を建てるべきなのでしょう。10節の後半で「^{10b}そして、他の人がその〔土台の〕上に家を建てています。ただ、おのおの、どのように建てるか注意すべきです」と、パウロは語りまた、12-13節に「¹²この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、¹³おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にはそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日には火と共に現れ、その日はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです」と語っています。10節の「他の人」と訳されている言葉(ἄλλος アロス)は、土台を据えた人と、家を建てる人が別人であるということの意味しています。パウロと違う別の教師の存在を指しているわけではありません。つまりこの言葉は、パウロが土台を据えた後、家を建てるという課題がコリント

の全教会員のそれぞれに与えられていると言っているのです。

昔バビロンの捕囚から解放されて（6c.BC）イスラエルに帰還したユダヤ人たちは、ゼルバベルという人の指揮の下、かつてバビロン捕囚の際に破壊されたエルサレム神殿跡に、新たに第二神殿の建築にとりかかりました。しかし、基礎（土台）部分の修復は済んだものの、神の宮を建てる仕事は十数年も中断します。その中断が神の御心に沿わない行為だということに気づかされた、預言者ハガイとゼカリヤは預言者として、イスラエルの民の怠慢を断罪します。その預言活動によってやっと建築作業が再開され、土台の上に第二神殿が完成したのでした（516BC）。つまり「土台を据えた」とことと「その上に家を建てる」とことはまったく別の仕事なのです。そしてそ



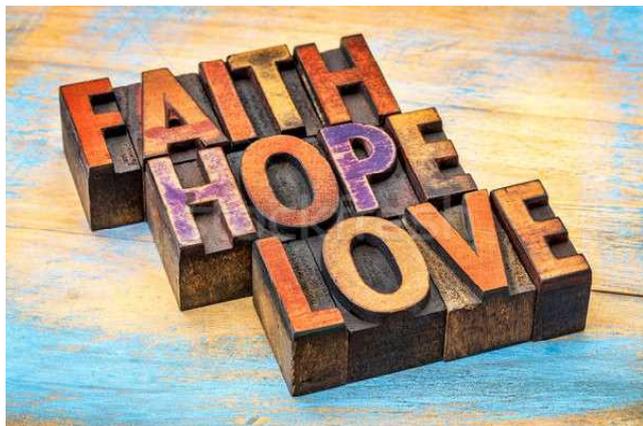
バビロン捕囚と破壊されたエルサレムおよび神殿

れは信徒のそれぞれに託された仕事なのです。イエス・キリストという土台の上に建てられる信徒の信仰生活という家・建物、その結果としての教会の姿を決めるのは、教会の全メンバーにかかっているのです。だから「それぞれ」が気をつけなければならないのです。

キリストという土台の上にかかるとなる素材を用いて、信仰の建物を建てていくか、パウロは第二のテーマに取りかかります。パウロがここで挙げている種々の素材は、土台であるイエス・キリストに相応しい物としての「金、銀、宝石」と、そうでない「木、草、わら」つまり、この建物に使われる素材は、この世の試練にあって、ひとたまりもなく崩れ去ったり、正体を暴露するような材料であってはならない、ということなのです。ここに挙げられている金や銀や宝石は良質の強い材料を象徴し、木や草やわらは、もろい材料を指しています。パウロはいつまでも残るのは「信仰と希望と愛」だ、とコリントの手紙一の13章で語っています。信仰という宝石と、希望という銀と、愛という金で造ら

れた家こそ、キリストという土台に相応しい建物なのです。信仰と希望と愛を、言葉にも行いにも表すようなキリスト者の生活は、良質の強い材料を用いた建物である、と言ってよいかもかもしれません。反対に、その言葉と行いに熱意もなく、罪を憎み退ける努力も無く、聖潔と正義に進もうとする気風もなく、枝葉末節にのみ拘泥するようなキリスト者の生活は、結局後者のもろい材料を用いた建物である、と言えるのかもかもしれません。

これらの違いは、ちょっと見ただけでは分からない場合もあるでしょう。しかし「**かの日**」が来ると、その建物にどういう仕事になされたか、すべてがあらわになるのです。「**かの日**」というのは、終末の「**主の日**」のことです。この日は「**火と共に現れる**」と述べられていますが、この火がすべてのものを「**試す（吟味する）**」火



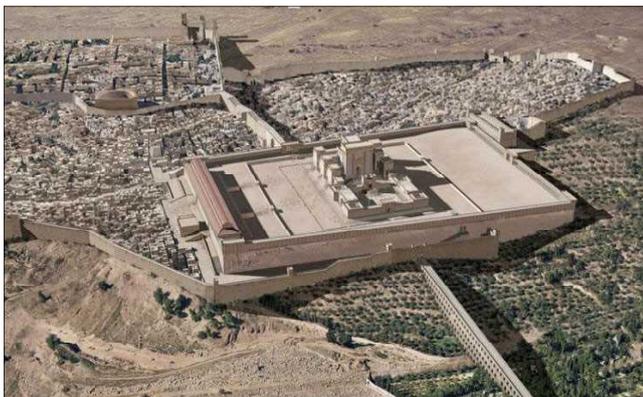
なのです。つまりこの終末的な「火が試す」という表現は、精錬して純金と金かすとを分けるという意味の表現です。〔※世界の終末に起る「審き」κρίσις という言葉の動詞形 κρίνω は「分ける」という意味で、終末には神がすべての善・悪また正・邪を分け、白黒をおつけになることを意味している。〕信仰者の信仰が激しく試される大いなる日は必ずやってくるのです。その時、各人の築いた建物の良否がいかんなく現れるのです。

「火」によって、木や草やわらで建てられた粗悪な建物は、焼きこぼたれます。しかし、良質の金属や宝石で建てられた家は、その火にも耐えることができる、というのです。はたして、今日、わたしたちはイエス・キリストを土台として、相応しいものを建てつつあるか、吟味する必要があるのです。

〈**建物のもう一つの真価**〉しかしこの建物にはもう一つの真価があることが示されています。14 - 17節。「¹⁴だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、¹⁵燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜

けてきた者のように、救われます。
16あなたがたは、自分が神の神殿
であり、神の霊が自分たちの内に
住んでいることを知らないのです
か。17神の神殿を壊す者がいれば、
神はその人を滅ぼされるでしょ
う。神の神殿は聖なるものだから
です。あなたがたはその神殿なの
です。」キリスト者が建てる建物は
激しい試みによって、吟味されま
す。「試す火」に耐えて建物が残
れば、その結果に「報酬」が与え
られます。この報酬とは何でしょ
うか。どこで、いつ、どのよう
にして与えられるのか、よくわか
りませんが、神は終わりの日に、
彼を「忠実な良い僕だ」(マタイ2
5:21)と言ってお迎えになるの
です。反対にその建物が燃え尽き
てしまえば、彼には報酬ではなく損
失(損害)がもたらされるのです。

建物の真価はそのように問われ
るものなのです。しかしこの箇所



エルサレム神殿(俯瞰した全景)復元模型

は、この建物が単なる建物ではな
いことを述べています。つまり、
この建物にはもう一つの真価があ
るということなのです。15節の
「その人は、火の中をくぐり抜け
て来た者のように救われます」と
いう言葉は、救いを保証する言葉
です。彼の建てた建物がいかに粗
悪なものであって、「試す火」に
耐えることのできないものであっ
ても、彼自身は救われるのです。
つまり彼は、火事に焼かれすべて
を焼失して、火災の中から着のみ
着のまま、身ひとつで命からがら
逃げた人のようにではあるが、救
われるという意味です。キリスト
の救いは変わることがありませ
ん。キリストの救いはすでに完成
しているのです。キリストの罪の
赦しは前払いです。イエス・キリ
ストはこう言われたのです。「人
の子は仕えられるためではなく仕
えるために、また、多くの人の身
代金として自分の命を献げるため
に来たのである」(マルコ10:45)。
救いの代価(身代金)は、すでに十
字架ですべて支払われたのです。
〔わたしたちの罪の懺悔は、それ
を確認する祈り。赦されて生きる
者であることの確認なのです。〕



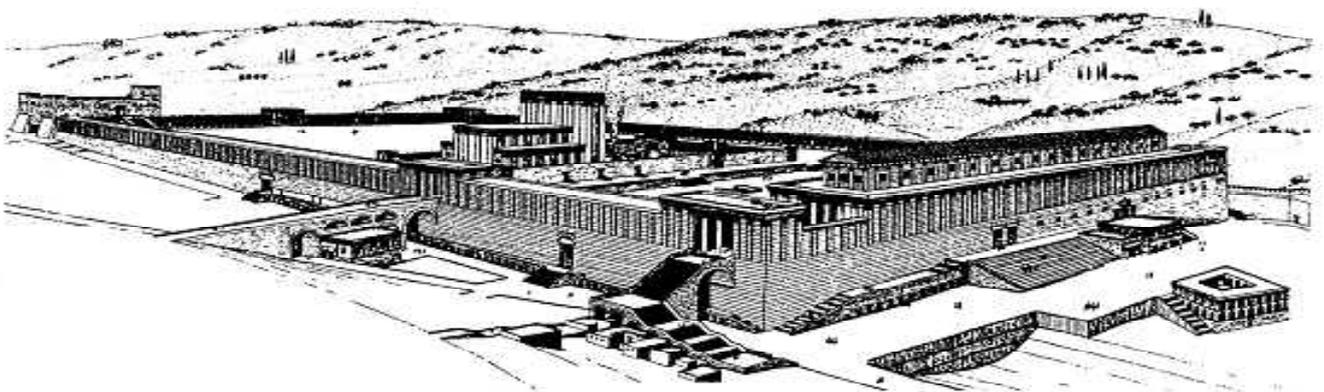
だから神は、自分の罪をしっかりと見つめると同時に、しっかりと前を向いて歩めと仰るのです。あなたの救いに関わる問題は

—今あなたが気づいていないことも含めて—わたしが全部引き受けた、だからあなたは神の助けによって思いっきり生きなさい、それが福音のメッセージなのです。キリストを土台とする者の救いはすでに保証されているのです。彼の建物が「試す火」に耐えることの出来ないものであったとしても、神は彼を救われるのです。そのことを次の言葉がさらに保証します。つまり「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか」。キリスト者

の真価は、最終的に神が判断されることです。一人ひとは神の目に尊い存在なのです。この世の人間観や価値観によって判定されない側面を持つのです。キリスト者各人は最も神聖な「**神の神殿**」と呼ばれています（1コリント6:19）。神の霊（聖霊）はその神殿に宿っておられる。もし「誰か」が、この神殿を「破壊する」とすれば、それは神聖な神殿への冒瀆であり、まさしく神への敵対行為なのです。エフェソの信徒への手紙4章30節はわたしたちの効果足ります。「**神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。**」

パウロは「知らないのか」という問いを、第1コリント書では何度も発していますが（3:16, 6:2, 3, 9, 15, 16; 9:13, 24）、この問いは、

ヘロデ大王の神殿の丘



キリスト教徒であればこんな基本的な教理は知っておくべきだということを含みとしています。つまり、わかりきったこの事実を、読者に思い起こさせようとしているのです。キリスト者は神の神殿なのです。神は御自身の神殿を御自身で守られます。同時に、神はキリスト者の生活の真価をも問われます。しかしそれによって、絶対的な神の恵み、神の恩寵が無に帰せられることはないのです。つまり神は人を無条件で赦し受け入れると同時に、この世の灯台として、地の塩としてキリスト者の生活が、建て上げられていくことを望んでおられるのです。

最後に先ほど引用しましたエフェソ書の2章19－22節をお読みしたいと思います。

2:19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、2:20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、2:21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。2:22 キリストに

おいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

2019.2.24 日本基督教団千歳丘教会礼拝



サグラダ・ファミリア(スペイン)

サグラダ・ファミリア (聖家族教会)
着工1882.3.19 (工事は現在も進行中)
来訪者、年間300万人

¹⁰わたしは神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように、土台を据えました。そして、他の人がその上に家を建てています。ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。¹¹イエス・キリストというすでに据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。¹²この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、¹³おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その日はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。¹⁴だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、¹⁵燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます。¹⁶あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。¹⁷神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なの

です。

¹⁰ Κατὰ τὴν χάριν τοῦ θεοῦ τὴν δοθεῖσάν μοι ὡς σοφὸς ἀρχιτέκτων θεμέλιον ἔθηκα, ἄλλος δὲ ἐποικοδομεῖ. ἕκαστος δὲ βλέπετω πῶς ἐποικοδομεῖ.

¹¹ θεμέλιον γὰρ ἄλλον οὐδεὶς δύναται θεῖναι παρὰ τὸν κείμενον, ὅς ἐστιν Ἰησοῦς Χριστός.

¹² εἰ δέ τις ἐποικοδομεῖ ἐπὶ τὸν θεμέλιον χρυσόν, ἄργυρον, λίθους τιμίους, ξύλα, χόρτον, καλάμην,

¹³ ἑκάστου τὸ ἔργον φανερόν γενήσεται, ἡ γὰρ ἡμέρα δηλώσει, ὅτι ἐν πυρὶ ἀποκαλύπτεται· καὶ ἑκάστου τὸ ἔργον ὁποῖόν ἐστιν τὸ πῦρ [αὐτὸ] δοκιμάσει.

¹⁴ εἴ τις τὸ ἔργον μενεῖ ὁ ἐποικοδόμησεν, μισθὸν λήμψεται·

¹⁵ εἴ τις τὸ ἔργον κατακαήσεται, ζημιωθήσεται, αὐτὸς δὲ σωθήσεται, οὕτως δὲ ὡς διὰ πυρός.

¹⁶ Οὐκ οἴδατε ὅτι ναὸς θεοῦ ἐστε καὶ τὸ πνεῦμα τοῦ θεοῦ οἰκεῖ ἐν ὑμῖν;

¹⁷ εἴ τις τὸν ναὸν τοῦ θεοῦ φθείρει, φθερεῖ τοῦτον ὁ θεός· ὁ γὰρ ναὸς τοῦ θεοῦ ἅγιός ἐστιν, οἵτινές ἐστε ὑμεῖς.